

2

小説
(1)

確認問題

- 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

■ 学習日

/

(注) 対峙Ⅱにらみ合っていること。

切っ先Ⅱ竹刀の先。

〈高橋三千綱「九月の空」より〉

抜き面Ⅱ相手が打ってくるのに対し、体をかわして相手の竹刀をはずし、空を打たせて、そのすきの生じた相手の面を打つこと。

□(1) ※に入る最も適切なことばを次から選び、記号で答えなさい。

- ア ためいきの出る思いがした
 イ 血の気が引くのを感じた
 ウ 楽しい思い出がよみがえった
 エ 気持ちひきしまった

□(2) 線①「北海道の原野で、ぼんやりとくまのしりを眺めている」とありますが、このときと共通していると考えられる勇の心情を簡潔に表していることばを、同じ形式段落から六字で書き抜いて答えなさい。

□(3) 線②「石渡は風だ」とありますが、これは石渡のどのような様子をたえたものですか。次から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

- ア しだいに勢いを弱める様子。
 イ すばやく身をこなす様子。
 ウ ふいに動きをやめる様子。
 エ ゆっくり向きを変える様子。

□(4) 線③「面の奥にひそむ二つの眼に、霧のかかった山あいに息づく湖のような静けさがあるのを勇は感じていた」とありますが、勇は、石渡の眼をどのようなものとしてとらえたのですか。次から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 不気味なほど落ち着きはらっている澄んだ眼。
 イ 開放的で元気があり、生き生きと輝いている明るい眼。
 ウ 気力をみなぎらせ、相手を圧倒しようとする鋭い眼。
 エ 無欲で孤独を楽しんでいるような純粋な眼。

□(5) 線④「透명한高い壁が立ちふさがっているのを見るような無力感」とありますが、このような表現は、石渡のどんな強さをとらえたものですか。本文中から、それが具体的に書かれている一文を探し、その最初の五字を書き抜いて答えなさい。

練習問題

● 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

《江戸時代のある大名家。小三郎は徒士(江戸時代、乗馬を許されなかった下級武士のこと)と呼ばれる低い身分であるが、藩主昌治のそば近くに仕える「お側小姓」という役職に取り立てられた。》

①「こんなことを申し上げてはお怒りを受けれませんが」

小三郎はよく思索しながら言った。

「あまり一人の人間をごひいきにあそばしては、家中への示しがつかなくなるのではございませんか」

「お前は城代のせがれのことを言っているのか」

「だれとは限りませんが、私はもう三十余日も、お忍びのお供をしております、これでは家中の噂にならずにいません」

「噂になっては悪いか」

「お側小姓は五人、ほかの者にもお目をかけて頂きたいのです」

「よし、聞いておこう」

昌治は言った。

「だがおれは、おれの好きなようにする、ということも覚えておけ」

小三郎は低頭してさがつた。

昌治は四月になってからまもなく、小三郎だけを供に領内を見て回った。それ以来三十余日、雨風にかかわらず、その見回りは休まずに続けられた。初めのころ、小三郎は自分が領地を実際に歩いて調べたことの帳面を見せた。昌治はあまり興味をそられた様子ではなかった。小三郎だけを供にするようになったのはその後のことだが、帳面を見せるとは二度と言わなかった。——この忍びの巡視は厳重な秘密にされていたが、藩主がこのように出歩けば噂にならずにはいない、まして供はまだ十五歳の小三郎ひとりである。口に出してこそ何

②「自分を見る人たちの白い目が、次第に露骨になってきたことを、小三郎は敏感に気づいていた。」

そして梅雨に入ったある日、彼が勤めを終わって下城して来ると、材木倉のところで十人ばかりの少年たちに取り囲まれた。年は十五六から十七八どまり、みな徒士の子たちで、ほとんど知っている顔だった。

「ちよつと聞きたいことがある」

と今原修平という少年が言った。

「裏の原まで来てもらおうか」

小三郎は彼らが、みな木剣を持っているのを見てとり、何の用かと聞き返しながら、③「いつかの時と同じだな、と思った。」

「原へ行ってからわけは話す」

と今原は怒ったような声で言った。

「ここではじゃまが入る、歩けよ」

彼らは四方を固めた。小三郎はおとなしく歩き出した。前には身分の高い武士の子弟だったが、今度は徒士の子たちだ。上からも嫌われ、下からも④「ねまれていると、歩きながら小三郎は思った。けれどおれはへこたれもしない、力以上の無理押しもしないぞ。雨はやんでいたが、原の雑草は濡れているので、小三郎はじめ彼らの袴も、裾のほうはずつくり濡れてしまった。」

〈山本周五郎「ながい坂」より〉

□①——線①「こんなことを申し上げてはお怒りを受けれかもしれませんが」とありますが、小三郎が昌治に「こんなこと」を言おうとする理由として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 昌治の期待にこたえられるだけの能力が自分にはまだないと感じていたから。

イ 家来たちの心にわだかまりが生じれば、藩にとって良くないと思っていたから。

ウ 尊大な昌治の側にいつも一人で仕えていることに、いや気がさしていたから。

工 昌治に、厳しい忠告にも耳を貸すような、立派な人物になってほしかったから。

(2) — 線②「自分を見る人たちの白い目」について、次のそれぞれの問いに答えなさい。

□① 小三郎を白い目で見る人たちの気持ちとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア あこがれ、敬う気持ち。
 イ おそれ、おののく気持ち。
 ウ うらやみ、にくむ気持ち。
 エ 見下し、あなどる気持ち。

□② 「自分を見る人たちの白い目」を感じ取って、小三郎は、どのような決意をしていますか。それが最もはつきりと書かれている一文を本文中から探し、その最初の八字を書き抜いて答えなさい。

□③ — 線③「いつかの時」とありますが、その時、小三郎は、だれから何をされたのですか。それを説明した次の文の□に入る最も適切なことばを、①は本文中から十字で書き抜いて答え、②はあとから選び、記号で答えなさい。

〈その時、小三郎は、□から□へ。〉

- ア 嫌がらせを受けた
 イ 剣術の腕を試された
 ウ いろいろと質問された

工 相談事を持ちかけられた

□(4) — 線④「そね(む)」と同じ意味のことばを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ねたむ イ さげすむ
 ウ しいたげる エ みくびる

□(5) 本文中から読み取れる小三郎についての説明として最も適切なものから選び、記号で答えなさい。

- ア 自分はどうせ藩内のきらわれ者だと開き直って、捨てばちな心境になっっている。
 イ 藩主の昌治に気に入られて出世しようと画策し、一生けんめいに努力している。
 ウ 自分の役職にほこりを持ち、他の徒士の子たちに対して優越感をいだいている。
 エ 周囲のやっかみに負けることなく、藩のために力をつくそうとしている。

①
②

□

□